

学校司書

interview

濱口さんに 聞きました！



学校司書 濱口志保さん
大分県出身。平成20年から佐世保へ。20年度に初めて学校司書に採用され、清水中と相浦中を受け持つ。21年度は愛宕中と清水中を担当。手先が器用で手芸好き。

「この前、濱口さんに薦めてもらった本、面白かったー」「それなら次はこれを読んでみらん？」

「濱口さんどんな本を読んだらいいか分からんとけど…」「冒険小説とか恋愛小説とか、どんなジャンルが好いとっ？」

市立清水中学校の図書室では、休み時間のたびにこんな会話が交わされています。

生徒たちに本を薦めていたのは、学校司書の濱口志保さん。

平成20年度、21年度の2年にわたって同校に勤務した濱口さんに、学校司書の仕事と生徒との関わりなどについて話を聞きました（3月12日、清水中学校）。

学校司書って

いろいろな仕事があるんです

以前から司書の資格を生かしたいと思っていましたんですけど、佐世保に引っ越してきて、たまたまテレビを見ていたら「市政だより」が放映されていたんです。それで学校司書募集の情報を知って、すぐ申し込みをしたんですけど、それがきっかけですね。

学校司書というのは、カウンターの中で本の貸し出しをするだけの仕事とされている人が多いんですが、実際それはほんの一部で、本のカバー掛けをしたり、次に買う本を考えたり、先生や生徒の調べもののために市立図書館に本を借りに行ったりと、すごくいろいろな仕事があるんですよ。

仕事を始めたころに比べると、 いろんな本をリクエストしてくれるようになりました

清水中で仕事を始めた当初、生徒たちは「司書って初めて見るし、どんな仕事をしているのかなー」という興味本位で図書室に来ていたようなんですけど、ずっと一緒に過ごしていくうちに、本を目当てに来る生徒が確実に増えてきましたね。

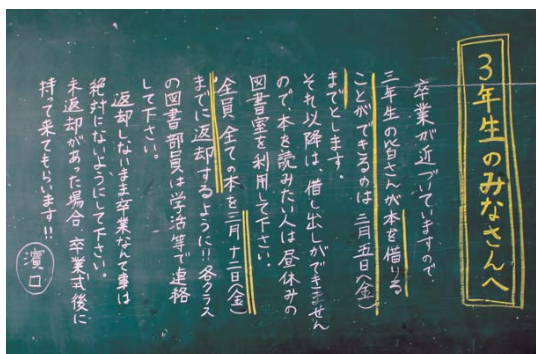
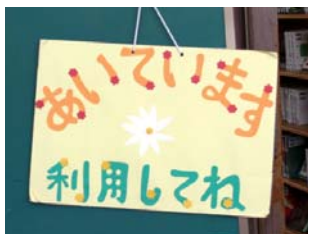
今までは昼休みしか利用できなかったのが一日中利用できるようになったので、ちょっとした空き時

間や放課後など自分の都合の良い時間を見つけて頻りに足を運んでくれるようになりました。

仕事を始めたころに比べると、本に関心を持つ子もすごく増えたと思います。生徒たちに読みたい本をリクエストしてもらっているんですけど、自分がリクエストした本が入るとやっぱり嬉しいみたいなんですよね。読みたかったっていうのもあるし、採用してもらって嬉しかったっていうのもあるみたいで、いろんな本をリクエストしてくれるようになりました。

いろんなジャンルの本を読み 生徒たちの要望に応えます

「何を読んだらいいか分からない」「どれが面白いか分からない」という生徒には、まず好きなジャンルを聞いて、興味を持ってくれそうな本を一緒に探すようにしています。ですから、わたし自身も時間があるときは中学生向けに限らず、いろいろなジャンルの本を読み、要望に応じた本を薦められるように心掛けています。これからは一人一人に声を掛けてアドバイスをし、読書が嫌いだと決め付けている生徒にも積極的に声を掛けていきたいと思っています。



読みたい本が手に入りやすければ子どもたちは自然と本に親しむようになるのでは

やりがいを感じるのは、自分で自分なりに変えていった図書室のディスプレイなどを見て、生徒たちが「つわー、変わったねー」とか「明るくなったねー」とか言ってくれるときですね。わたしは特に図書室の雰囲気づくりを重視しているので、「頑張っちゃったよかっただな」と思います。

嬉しいのは、新刊を入れたときなどに、「どんな本が入ったの?」と聞いたり、生徒たちがすごくキラキラした目をして集まってくるんです。生徒たちの真剣に本を選んでいる表情や、「次は何を読もうかな」「これも借りたけどあれも借りたい」と考えている様子は、すごくキラキラしているように見えます。世間では「読書離れが進んでいる」とか「最近の子どもは本を読まない」とかよく言われているんですけど、そんなことはないんじゃないかなと思います。

読書環境を整えて、子どもたちの読みたい本が手に入りやすくなれば、子どもたちは「わたしたちが思っているより」自然と本に親しむようになるんじゃないかと思っています。



濱口さんイチオシの新刊コーナー



昼休みの清水中図書室は生徒でいっぱい